

占領下東大の学生運動と「わだつみ会」(I)

— 岡田裕之氏に聞く —

今 西 一

はじめに

私は前稿「早稲田・1950年－歴史の証言－」（『立命館 言語文化研究』第20巻3号，2009年，小樽商科大学図書館のホームページの Barrel でも読める）のなかで，東京大学日本共産党細胞の国際派のなかで起った，戸塚秀夫（東大名誉教授）・不破哲三（元日本共産党議長）・高沢寅男（元社会党副委員長，故人）氏らに加えられた，「リンチ・査問」事件の年月日を，査問の当事者であった安東仁兵衛氏の『戦後日本共産党私記』（現代の理論社，1976年）などに従って，「1952年2月14日」としてしまった（ただし，同書の77年の4版では，「51年の春先」（149頁）と訂正されている）。ところが，法政大学の名誉教授岡田裕之氏からお葉書をいただいて，「1951年」の間違いだと指摘していただいた。この吉田^{よしきよ}嘉清・竹内良能氏へのインタビューへの反響は大きく，他にもいろいろなご指摘をいただいているが，それは別の機会に書くこととする。

年月日については，既に「戦後初期東大学生運動史年表稿」（『一・九会文集』第6集，2003年）を作った歴史家の犬丸義一氏によって，天候まで調べられ，査問の日付を「1951年2月14日」と確定されていた。だが，この葉書のおかげで岡田氏とお会いでき，氏の生い立ちから，当時の東大の学生運動と日本共産党の活動，「わだつみ会」のことなどを聞くことが出来た。また氏から力石定一氏（法政大学名誉教授）など，占領期の学生運動の重要な人物を紹介していただき，目下，オーラル・ヒストリーを続けている。その成果は順次，本学の紀要などで紹介していきたいと考えている。

岡田裕之氏と母香氏

岡田氏の生い立ちについては、同氏の『我等の時代—メモワール：平和・体制・哲学』（時潮社、1999年）の「第Ⅰ部 若き日々。共産主義と学生運動」のなかで詳細に語られているが、今回の聞き取りで、特に岡田氏のご両親のことを詳しく聞いた。とりわけ興味深かったのは、母の岡田香（かおり）氏のことであった。女子高等師範を卒業しておられ、4年生の時には、第1次世界大戦後のヨーロッパの婦人運動を紹介して、日本女性の自覚を促す作文を書いている。後年、下田歌子氏の実践女子専門学校で教授になり、羽仁もと子氏らと共に『主婦の友』付録の家計簿の執筆者であった。当時としては珍しい「職業婦人」であり、彼女の生涯自体が女性史のなかで特筆されるべき人物である。岡田氏の思想に、最初の大きな影響を与えたのは、この母香氏であろう。

岡田氏は、中学校をメソジスト系の青山学院中学に進学するが、ここでのリベラルな教育は、氏を満足させるものがあつた。また、この中学で生涯の親友の一人、新島淳良氏（中国史）と出会つたことも、忘れられない思い出である。新島氏は、既に中国史の本を書くほどの秀才であつた。また日本郵船社員の子息である関根毅氏に、英文のインビテーション（招請状）を貰つてホーム・パーティに呼ばれ、戦時下でトランプ遊びを行い、ジャズを聴くようなこともあつた。そこで第一次大戦下のイギリス兵士の戦死写真を見て、大きなショックを受けている。また友人の細井辰雄氏からは、はっきりと「敗戦」を予言されている。良き友人たちに恵まれた中学時代であつた。

一高から東大へ

岡田氏は、1945年の春先に、B29の爆撃下で父林平（りんぺい）氏の蔵書のなかの猪俣津南雄著『極東に於ける帝国主義』（1932年）を読んで感動し、「太平洋戦争の原因と予想される帰結」を知り、経済学への関心を深めた（前掲書、7頁）。そして45年6月12日、戦時下の夜の入学式で第一高等学校（一高）の

理科に進学したが、勤労働員と飢餓で体をこわし、新島氏を連れて自宅に戻り、46年に休学を終えて一高の駒場寮に復帰する。

47年の春、駒場の構内に原口嘉明・舟山晟・島田豊氏らの連名で、哲学研究会の呼びかけが張り出されていた。岡田氏は早速入会したが、哲研の勉強は、真下真一氏（当時は寮監）の手打ちタイプ版で、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』の原書の輪読から始まった。

若き岡田氏は、キルケゴールかマルクスかに迷い、主体性論争を学んでいった。うらやましいほどの教養主義であるが、後年、教育学者の竹内洋氏に言わせれば、最後の「教養主義的マルクス主義」の世代とも言える（『教養主義の没落』中公新書，2003年）。

この一高時代、48年2月の一高紀年祭へのGHQの干渉への反対運動を契機に、哲学研究会は、政治・政党活動が活発になり、哲研メンバーの多くは共産党に入党している。岡田氏もまた反米闘争に期待をもって入党する。

しかし、1950年のコミンフォルムの野坂参三「平和革命」論批判にはじまった、日本共産党の「所感（主流）派」と「国際派」との分裂のなかでは、岡田氏ら東大の学生は、圧倒的に「国際派」に結集する。

朝鮮戦争の最中、岡田氏らはレッド・パージ反対闘争に駆けまわっていた。そして51年4月5日、銀林浩（数学）、飯尾要（経済）の指導のもとに、20人ほどで東京の飯田橋駅頭で、第3次世界大戦を防ぐベルリン・アピールと朝鮮戦争反対の宣伝を行なった。しかし、これは「政令違反（占領軍批判）」で、岡田氏ら16人は逮捕され、小菅拘置所に収監された。この時の拘留開示小法廷の記録『吾が友に告げん』は、なかなかの名文で、御茶の水女子大の反戦学生同盟に参加していた岡百合子氏は、当時この文を読んで、「私もこの人たちのように英雄的に闘わねばならない」と感動したそうである（『私の女高師・私のお茶大』創英社，2004年，147頁）。この小冊子は、湯浅朝雄（国文）、長谷川興蔵（医）、堤清二（経済）らによって書かれたものである。最終的には、1人も沖縄へ強制労働に送られることもなく、勝利したといえるこのたたかいは、彼らの栄誉であった。この16人の軍事裁判は、佐多稲子氏によって小説に

もなっている（『みどりの並木道』1952年、『佐多稲子作品集』第7巻，1959年）。

日本共産党は、51年の新綱領を押しつけてきて、「国際派」の学生に自己批判を迫るが、スターリンや毛沢東の権威を掲げられては、「国際派」としては立場がない。ここで自己批判をして、「主流派」に復帰した不破氏や木下素夫氏、徹底抗戦を主張した武井昭夫・安東仁兵衛氏、第三の生き方を模索した力石・堤氏らがいた。しかしインタビューでは、「秘密黨員」として、社会党や大企業・官公庁に入ってしまった、「第四の途」もあったと語られている。

立命館の「リンチ・査問」事件、「わだつみ会」

東大の「国際派」は、いわゆる「戸塚事件」と言われる「リンチ・査問事件」で大きな打撃を受けていたが、さらに学生運動のなかでは「リンチ・査問事件」が続いた。特に有名なのは、京都の立命館大学で1952年に開かれた全学連第5回大会での「所感派」による、「国際派」の代議員に対するリンチ事件であった。

その場に居合わせた岡田氏によると、「大学地下室に案内された。そこはしかしテロの修羅場だった。中核自衛隊と思わしき数名が素手で飯島（津島，教育大），柿本（山下，津田塾）ら大会に出席していた国際派の同志を捕まえて暴行をくわえている最中だった。（中略）私はすぐ目を反らし部屋から逃げたが、顔を腫れ上がさせられていた飯島は下に座らされていたし、椅子の上では柿本さんがブラウスまで破られていた」という状態であった（岡田前掲書，50頁）。このリンチ事件については、当時東京学芸大学の一年生として全学連大会に参加し、自らもリンチの被害者であった広松渉氏によって、詳細に語られている（『哲学者広松渉の告発的回想録』河出書房新社，2006年，108～116頁）。

このように学生運動が衰退していくなかで、岡田氏の前には、「旧全学連と東大国際派が努力して作った学生組織として残ったものは〈わだつみ会〉しか無」かったのである（51頁）。そこで岡田氏は、医学部の長谷川氏や西洋史の古山洋三氏らと「わだつみ会」の活動に専念する。

この「わだつみ会」の運動が、いかに重要なものであるかは、保坂正康氏の

『「きけわだつみのこえ」の戦後史』(文藝春秋, 1999年, 文春文庫, 2002年)や、最近では、福間良朋氏の『「戦争体験」の戦後史』(中公新書, 2009年)などの力作によって詳細に論じられている。しかし、特に保坂氏の著書への疑問は、第1次の「わだつみ会」が、学生運動からの転機を求めてきた共産党員の合法活動の場としてつくられていたことが、殆ど書かれていないことである。「わだつみ会」での共産党員の活動を書かないことに、何か保坂氏の意図があったのだろうか。

岡田氏は、法政大学退職後も現役で活動しておられる。専門の経済学では、『社会主義経済研究』1・2(法政大学出版会, 1975, 1979年), 『経済原論』上・下巻(同, 1976, 1983年), 『貨幣の形成と進化』(同, 1998年), 『ソビエト的生産様式の成立』(同, 1991年)など多数の著書を書かれ、最近では『日本戦没学生の思想』(同, 2009年)も公刊されている。

インタビューは、2009年6月1日、東京の岡田氏の自宅で行ない、下書きを一橋大学大学院の山内明美氏に作成してもらい、それに岡田氏自身が大幅に加筆してくださったのが本稿である。岡田氏の精緻な記憶力には驚嘆するばかりである。

岡田裕之氏インタビュー

I 生い立ち

今西：まず岡田さんの生い立ちからお伺いできますか。

岡田：生まれたのは1928年10月20日で、場所は千葉県印旛郡六合村(合併して印旛村)瀬戸(江戸時代は瀬戸村, 明治に合併して六合村瀬戸)261番地です。今は兄が跡を継ぎ墳墓の地を守っています。代々瀬戸村名主の家で近年取り壊した母屋は、元文四年(1739年)建築の大きな家屋でした。長屋門は安永年間(1772-79年)の建築で、佐倉市くさぶえの丘に復元移築されています。古文書が少しばかり残っていたので、福尾武彦氏(千葉大名誉教授)に『岡田家文

書目録』として整理していただきました。京都や富士吉田などと商取引があるのですが、岡田家江戸屋敷を通じての取引だったのでしょうか。江戸古地図に、岡田家代々の名乗りである「岡田忠左衛門」の名前が、伝通院前に武家とも町人とも異なる部類の敷地に書かれています。江戸末期、印旛沼は利根川・江戸川の水運で江戸と結ばれ、高瀬舟（鷗外の高瀬舟でなく北斎描く関東高瀬舟）が往来していました。父は隣村からこの高瀬舟に乗って沼を渡り、岡田家に婿入りしました。

私は幼少期には毎年夏冬休みの全期間をここで過しました。跡とり娘の母の生家であるこの家が私の故郷です。

今西：お父さんは、どんな方だったのですか。

岡田：父は林平（りんぺい）と言います。父の父（祖父）は岡田家の生まれで、隣村宗像村村長の高石家に婿入りしましたが不縁で別家し、祖父の次男である父は別家高石家から母の婿となり、母の姉（伯母）の婿となった義祖父の婿養子となって、岡田家に戻った形となりました。地主の家柄では相互縁組が通例であったようです。岡田家本家からすれば実祖父（母の父）の子は三人とも女で、長姉が婿を取って跡をとり、末妹がまた婿をとって長姉夫妻の養子となったのです。次姉は隣に別家を立て結婚し、新宅を名乗りました。

両親とも上京して学校（東京商科大学と東京女子高等師範）で勉強していました。親戚同士ですし、母は飯田橋揚場寮から御茶ノ水の女高師に通い、父は九段の下宿住まいで、一ツ橋の商大に通いました。震災前の東京の範囲は小さく、父がドイツ語を母に教えたりしていましたので、結婚は自然の成り行きでした。父は千葉師範に進みました。父の家は余裕なく師範ならば給費をもらって勉学できました。卒業して隣村船穂村小学校に勤務しましたが、向学の念やみ難く、上京して東京商科大学専門部教員養成所に進学し、御田小学校高等科の商業科の教員になりました。商大では商学と経済学を学びました。父の蔵書の改造社版『経済学全集』が私の経済学への導きとなったり、62年、法政大学経営学部就職して、最初に「商業論」の担当教員となったのも、父の縁のように思えます。

今西：お母さんの生い立ちを聴かせてください。

岡田：母、岡田香（かおる）は東金高女を卒業し、女高師の理科家事科に進学しました。母は読書家で高女「図書室の図書を全部読んだ」と言っていました。『レ・ミゼラブル』を『哀史』、『ユートピア便り』を『無何有郷通信』などと覚えていましたから本当でしょう。四年生（現在の高校一年生）の論考（作文）が残っていますが、第一次大戦後のヨーロッパ婦人運動の成長を基準に、日本婦人の自覚を促した堂々の論調です。理科家事科は新設学科で大正期、生活合理化、女性の科学への関心を育成する趣旨から設けられました。各県一人づつの採用で隣県茨城県出身の橋新（しん）さんは、五・一五事件の橋孝三郎の縁者というので子ども心に記憶しています。女高師を卒業して木更津高女の数学科の教員となり寮監を兼ねました（当時は県内に高女は数校しかなく、通学はまず困難で、生徒は寮生活が基本です）。ここで結婚しましたが、寮が火事になり新婚丸焼けだったと話していました。

今西：当時の良家としては、珍しい働く女性だったのですね。

岡田：勤労女性は当時は「職業婦人」と呼ばれていました。母の義父（義祖父、伯父）は千葉中出身ですが、日露戦争に従軍し功五級金鷄勲章を誇りにしていました。当時の学徒兵とも言えます。伯父は母に「職業婦人は気が強い（つええ）なあ」と言っていました。母は男と対等に議論するし、理では負けなかったでしょう。写真からして当時の「モボ・モガ」のモガ（モダン・ガール—今西）で、田舎では汽車に乗ってもバスに乗っても颯爽として目立ちました。

今西：お父さんの本棚の本を読んでおられたのですね。

岡田：『経済学全集』ですね。表紙が硬く重ねても立てても丈夫でしたから、最初は積み木代わりに遊んでいました。物心付いてから中味を読んでも非常に面白く、山田盛太郎、有澤廣巳、宇野弘蔵、土屋喬雄などの名前を覚えました。空襲激しい1945年春に読んだ第二十四巻、猪俣津南雄『極東に於ける帝国主義』には感激し、呆然として巻措くあたわずでした。以後あれほど感激した本に出会っただろうか。今でもその時の父の本棚だけは書斎にありますが、後に『極東に於ける帝国主義』を古本で買ったなら300円で、涙が出そうな安い

本になっていました。この本は戦争の原因を日本の中国侵略にあると明言し、実証しているのですから。私は戦争の原因を尋ねて、ここに原因を突き止めたのです。

今西：でも猪俣は、労農派マルキストですね。

岡田：こちらは中学生でしたからね。分からないですよ。山田も宇野も有澤も区別は付きません。土屋、本庄栄次郎、新庄博、大内兵衛なども書いていましたが、マルクス主義は分かるが講座派、労農派の区別など戦後の知識です。戦争中この本が読めたのは大変なことでした。

今西：名著ぞろいですし、戦時中の発刊だったら発禁の本ですね。

岡田：よくマル経の全集を揃えたなと思いますが、流行っていたんだな、あの頃は。

今西：そうですね。1932年頃には、あれが全集ででていたというのがすごいですね。

岡田：けっこう民間で持っていました。両親ともマークされてはいませんから。だから戦中はマルクス主義文献をまったく読めなかったという事は無かったと思いますね。ある所にはかなり文献があった。

今西：お父さんは、どういう思想的立場の方だったのですか。

岡田：父は船穂村で教師をしていたとき、ピアノとヴァイオリンが好きで、音楽で身を立てようと考えた時もあると言いましたが、一橋（大学）に行ったことから結局実業界に出て実業的な仕事、つまり金儲けをやりたいという志向が強かったと私は思います。理屈ではマーシャルの受け売りを言っていましたが、学者向きというより実業での成功を夢見たのでないでしょうか。よく母に「玉砂利御殿に住ませてやる」と言っていました。ただ師範出なので教員勤務は義務的でそれを悔しがっていました。「俺は小学校教師で終わる人間でない」は父の口癖でした。実業で成功する野心はあったのですが、ことごとく失敗しました。商人気質というよりやはり教師調でしたから、師範教育と教師職業に拘束されました。義務を終了し恩給を得て、39年、芦田均社長のジャパントイムスに勤務したときは嬉しそうでした。戦中この英文雑誌に囲まれていたのです

が、イラストだけで読まなかったのは残念でした。

今西：敗戦の時は、お父さんはお元気だったのですか。

岡田：もちろん元気でした。母の方が学問的だったので、もっぱら母から影響を受けましたし、私は私の教育にかける母の情熱を熱っぽく感じました。父の方は子供連中みなまったく尊敬していないという悪いが、事業を企画しては失敗し、会社は気に入らぬとってはやめるので、母の方が圧倒的に人気がありました。みな「お母さん、お母さん」でした。父の背中ならざる母の背中を見て育ちました。

今西：ご兄弟は何人ですか。

岡田：六人です。上に男二人、下に女四人です。したがって私に姉と弟はいません。

今西：お母さんは、よく学問の話をされてのですか。

岡田：ええ大好きですよ。議論好きだし（父も議論は好きです）何でも教えてくれました。質問（チェック）もうるさいほどです。母は世界文学を教えてくれたし、植物採集、昆虫採集、標本作りなど本格的で、それで博物学にも興味を持ちましたし、化学実験一式も買ってくれました。哲学はベルクソンでした。分かりませんでした。「エラン・ヴィタール」は覚えています。それに共産主義思想にも理解を示したし、振り返れば大正デモクラシーの精神というか、第一次世界大戦後の精神というものを強く感じます。「思想が罪であるとは無理な話だ」と言った母の言葉は忘れません。思えば治安維持法（25年）のことでした。死後蔵書を整理したら英文『ノラ』や、吉野作造編『婦人問題』などがありました。父も軍国主義ではなかったが、母ほど明確ではなかった。

今西：お母さんは教授で、『主婦の友』などにも原稿を書いたりしておられたのですね。

岡田：『主婦の友』付録家計簿の執筆者でした。当時家計の合理的管理の考えから『家計簿』の専門家が生まれましたが、羽仁もと子、氏家寿子、岡田香の三人の中で一番無名なのが母でした。母は上京して小石川小学校で教諭を務めていましたが、家計簿と家事指導の著作で認められ、36年、下田歌子さんの実

実践女子専門学校の教授に抜擢されました。

今西：お母さんは、当時の生活合理化運動を推進しておられたのですね。

岡田：ええ。生活合理化運動，良妻賢母教育と主婦にも理系の教育をとということです。実践女専では家事科教育を担当しましたが，これは自分の経験から分かったのですが，大学の運営問題にも深く関わっていました。教授と竹内理事の対立，下田派・反下田派の対立です。渋谷区常磐松町の借家は学校のすぐ近くでしたから，授業を終えた先生方は我が家に集まりよくケンカの相談をしていました。母は下田派（歌子先生は36年歿）で着任早々闘っていたのでしょう。

後に自分が法政大学教授となり，研究・教育・大学運営の三重の仕事に直面しましたが，私は妻の内助に支えられました。母親は男尊女卑のこの時代，先駆者として研究執筆，教育，大学運営において男性教授に負けないだけの努力を払い，それに重なる六人の子供の育児に手を抜かず，本家を頼って上京する甥姪たちの世話や縁談に日夜奔走していました。夜を勉学と執筆に当てていましたから，女中（家事手伝い）は二人いましたが，四時間とは眠っていなかった筈です。子供から見ても母の努力は限界状況にありました。

Ⅱ よき友，戦中の青山学院中

今西：岡田さんは，青山学院中学に進学されたのですね。キリスト教のメソジスト派の学校ですよ。

岡田：ええ。もっとも希望して進学したわけではありませんが。病弱だった兄が先に進学していて，家の近くだし勤務先にも近かったから，乳飲み子を抱えた母にすれば，電車通学の府立十中（杉並区）より都合がよかったからではないか。でも入ってみたらよい学校だった。戦争中にあんな良い学校は無かった，今思えば得した感じです。青学（隣の青山中，府立十五中，現青高と区別して）は受験校ではなく秀才は少数ですが，病弱，二世，帰国子弟，庶子と曰くつきの入学者が多く，なかに人材がいました。秀才はみな面白くないと感じて青学に入ってきますが，どうして親米，反戦，キリスト教とバタ臭く，期待しなかっただけ戦中は素晴らしかった。私の運動のふるさとです。逆に東大経済学部な

ど、教授はつまらない授業をしていました。小学校に逆戻りで期待はずれでした。生意気な言い方ですが。

今西：新島淳良さんがお友達だったのですね。

岡田：一番の親友と言いますか。なканずく話し相手として良かった。友情を人生で初めて体験したのは新島君のおかげです。母との会話も妹たちがあきれほど何時間も果てることなく続くのですが、新島君ともそうでした。いくら話しても尽きないんだ。私なんかの話は理詰め面白くありません。新島君のは違います。講演も上手です。

今西：新島さんは、早熟だったのですね。

岡田：そうなんです。『上世支那興亡史』を中学二年生で書いた。「書いたから読んでくれ」と言います。本は読むものとそれまで考えていましたが、本は自分が書くものだ、これは衝撃的な発見で、新島君に手書き、絵入り、地図入りの美装本を差し出されて言葉が出てきませんでした。

今西：新島さんは漢文が相当読めたのですね。

岡田：新島君は漢文の素読をさせられたようですね。子供の頃おじいさん（祖父）に習ったそうです。家に遊びに行くと漢文の全集がずらり並んでいました。

今西：だいたい昔の武士の教育では、7、8歳の頃から四書五経を素読させられていますからね。

岡田：私には漢文の素養はありません。新島君は漢文の素養のままに中国研究、中国語研究に入りました。新島君とは同時に一高に入学しましたが、中国語専攻クラスは生徒に不評で、多数は英独仏語専攻に移りたがります。私は青学時代はどちらかと言うと理系で、文学には疎く、芥川龍之介だ宮沢賢治だと新島君に教えられました。彼は絵も上手で軍艦の絵が得意でしたが、マンテーニャだダヴィンチだチチアんだと画集を見せてもらいました。

今西：新島さんというのは、大変ユニークな方だったのですね。

岡田：ええ、一つ一つユニークで、戦中は勤労働員先で勤労少年に同情してストライキを組織したり、空襲で被害が出ると戦災孤児慰問活動をしたり、一見病弱文弱の印象と異なって行動的です。戦後共産党に早く入党したり、一高駒

場寮を出て地域に児童文庫（すいれん文庫）を作って子供会を組織したり，実行力があり，私はコンプレクスを感じました。成人してからは早稲田大学で教えていたと思ったら毛沢東文化大革命支持，私が厳しく批判して後すぐ反毛沢東になり，中国関係研究文献を処分して大学を辞め，ヤマギシ会に入る。マスコミに乗る。そこもすぐ愛人を連れて脱会，正妻と離婚して学習塾で生計を立て，愛人に死なれて正妻と復縁，ヤマギシ会に戻る。中学時代の病弱文弱の生真面目な友人はどこへやら，酒好き女好きの大人になってびっくりでしたが，最後まで親友として付き合いしました。会えば口を交わす前から友情にあふれ，すべてを互いに了解できました。さすがに私の家内は「新島さん，嫌い！」ですが。

今西：新島さんは，東大に進まれたのですか。

岡田：いや新島君は一高で結核になってしまって，療養中に一高が廃校になりました。東大には行かなかったけれども，倉石武四郎（東大教授）さんに非常に可愛がられたようです。中国研究所から安藤彦太郎さんの推薦で早稲田大学の教授に就任しました。新島君は経歴上は一高中退です。

今西：それもユニークな経歴ですね。

岡田：ユニークと言えばそうですが，中国語は出来るし，話は上手だし，才能は抜群で多くの著作を遺しました。

今西：当時，日本郵船の社員の子息の関根毅さんのパーティに招かれたそうですね。そこでアメリカナイズされた生活を見られたのですね。

岡田：あれには驚きましたね。横文字の招待状 Birthday Invitation を頂きました。アメリカの習慣でしょうか，招待されるのは青学の級長クラスの閉鎖グループで，そこでの社交です。でもこの閉鎖性が良かった。青学の普通の生徒は旧制高校から帝国大学を目指すわけではなく，勉強はしません。私とは話は合いません。

今西：戦時下でしょう。

岡田：ええ。ジャズのレコードはあるし，本（少年向き）は本棚に一杯あるしね。ジャズは雨戸を閉めて聴きました。でもリスト（『ハンガリー狂詩曲』）や

ヨハン・ストラウス（軽歌劇『こうもり』）の方が聴きやすかった。これらは敵性音楽ではありません。お母さんがとても綺麗な方で、パーティを仕切って下さった。関根君の家でサロンと言うものを始めて経験しました。その後会いたくて幾度も連絡しましたが、会えないまま関根君は逝去しました。東京工大を卒業し建築家となり広島大学教授になりました。

今西：欧米なら週末のホームパーティはよくありますが。

岡田：日本では戦前には、一部を除いてそういう習慣はありませんでした。

今西：ましてや「敵国」の音楽であるジャズを聴いたりしていたのですから。

岡田：ショックだったのは、英文写真集 For the Worthy Purpose? を見せられたことでした。これは第一次大戦の写真集で、イギリスの兵士の死骸がゴロゴロと転がっていました。戦争がいかに悲惨かを見せつける写真でした。これは関根君の両親が、アメリカで仕入れてきたものです。“名誉ある目的の為に？”こんな本持っていたら憲兵に捕まる。友人の大久保君もこの件を覚えていました。説明は英文ですが、それくらいの英文は読めました。

今西：細井辰雄さんとも親交があったのですね。

岡田：細井君とは今でも交友が続いています。彼は二高（仙台）を経て経済学部に来ました。彼からは社会思想、社会科学を教えてもらいました。私は理系で数学・物理・化学が得意で英語も出来ました。社会科学はあまり知らなかった。社会思想、当時では「危険思想」を教えてくれたのは彼でした。河上肇、河合栄治郎、石川三四郎と名前を挙げ、東大の優秀な連中はみなマルクスだぜ、とはっきり勤労働員の工場で囁きました。怖ろしげな名前でした。

今西：勤労働員にも行かれたのですね。

岡田：44年7月から青学の授業は停止で勤労働員となり、大森にある日本特殊鋼（64年倒産）の工場で働きました。受け持ちの機械はシェーパー（成形機）で、B29迎撃の30ミリ機関砲の銃床を切削しました。この会社は元来は潜水艦用の電磁石コイルの生産工場でしたが、B29空爆対策に急遽機関砲試作に取りかかったのです。二交代制で早番は二時には作業終わり、勤労働員では生徒は良く顔を合わせますから、工場でも帰り道でもそれは会話は弾みました。我々

高校進学組は文学談義から音楽談義，社会思想談義となり，戦局の分析となりました。関根サロングループの主題は，次第に細井君の主導するところとなります。社会への「危険な目覚め」でした。理系の私は文学も社会思想も音楽も聞き役で，もっぱら原子物理学の知ったかぶりの受け売りでした。細井君も中学生の背伸びの受け売りだったのでしょう。それで私も湯川秀樹『存在の理法』，アインシュタイン・インフェルト『物理学はいかにして創られたか』を覗きました。

中学だとクラス別授業だし，そうはゆっくり話せないし，勤労働員では互いに同じ工場にいまして，作業の話ではつまらないから，どうしても学問的な話となります。一種，我々サロングループにとっては，工場は逆の学校みたいになりました。私もグループを主導したのかもしれない。

今西：細井さんは，今はどこにおられるのですか。

岡田：今は小金井に住んでいますが元気にしています。彼は高橋幸八郎（八郎右衛門－今西）ゼミから協和銀行へ就職しました。協和銀行の関連会社の向洋ベアリングという会社で職業を終えたと思います。

今西：細井さんは，「戦争は負ける」「天皇制はなくなる」と仰っていたのですね。

岡田：そうです。細井君ははっきり言いましたね。東京大空襲があり負ける予想は付きましたが，あれには本当に驚きましたね。天皇制は無くなる，大統領も決まっている，と言うんですよ（笑）。賀川豊彦か加藤勘十かとね。なるほどなあと思いました。そんなある日，戦災直前の銀杏並木の東大正門の所へ一緒に行って，彼が「この中では反戦映画が見られるんだ」と言ってね，かぶっていた帽子を脱いでお辞儀をしました。「反戦映画」といっても30年代のフランス映画くらいのことではたしてでしょうか，東大が輝いて見えたのは確かです。

“平和”という言葉は現実には意味不明で，逆に“反戦”には生々しい現実の意味がありました。みんなで頭を下げたのですが，入学してみたらそれほどいい所ではなかったのですが（笑）。戦後に知ったのですがその頃南原法学部長は終戦工作をしていました。

今西：東大法学部の終戦工作ですね。

岡田：当時はまったく知りません。細井君は有斐閣と記憶するが、本屋で大内兵衛の『南方通貨圏…』と言う表題の著書を指して、大内兵衛の墮落だと声を荒げました。

今西：戦争中は、そういう先生方が多かったですね。

岡田：後に法政大学院で指導を受けた久留間鮫造先生などは、当時大原社会問題研究所の所員で、『資本論』研究に没頭していましたが、それは表に出せないで、高野岩三郎所長の下で統計学古典選集の翻訳を行っていました。久留間先生から後にその時に訳した、グラントの死亡率統計による男女性比の発見の話や、統計「表」をなぜ「table」というかなどのお話を伺いましたが。久留間先生は、大内君は社会の先頭に立って仕事をしたい、という意欲が非常に強すぎると言われました。いつでも表舞台に出たいということですね。

今西：大内さんは、戦後すぐに東大に戻れたのですか。

岡田：いや戦後すんなり東大に戻ったと思いますが。大内さんは戦争直後、戦時公債支払いの打ち切りを提唱し、政府に大いに貢献しました。

今西：山田盛太郎さんや有沢広巳さんたちも、戦後は東大に戻られたのですね。

岡田：大いに威張りで東大に帰って来たんじゃないですか。

今西：コム・アカデミー事件や人民戦線事件で追放され、東大に戻れなかったのは、平野義太郎さんぐらいなんですね。平野さんは、大東亜共栄圏礼賛の本を書いていますからね。

岡田：大内さんはそこまではやらなかったでしょう。

今西：法学部の人の話では、平野さんを東大に戻すのに反対したのは、中田薫さんだったそうですが。

岡田：ありうる話ですね。中田薫という人はなかなかガッチリした研究をした学者ですが。経済学の場合は講座派、労農派の対立は激しかったですからね。派閥争いも激しかった。しかし戦争が終わってからは大内さんは大威張りで東大に復帰したと思います。

今西：戦後の東大経済学部では講座派の方が強かったのですか。

岡田：いや、わかりません。両方でいろいろ言うんですよ。(笑) 僕は大河内一男さんのゼミですからね。講座派系だったのでしょうが、どちらもどっちで、言い合いますからね。

今西：大河内さんは、講座派的な立場だったのですか。

岡田：ええ、大河内さんに言わせると労農派にいじめられつつね。

今西：そうですか。30歳そこそこで書かれた、最初の著書『独逸社会政策思想史』は名著でしたね。

岡田：名著ですよ。よくあれだけ勉強したなと思ってね。

今西：岡田さんは戦争中も大変でしたでしょう。東京爆撃のB29が撃墜され、搭乗兵が落下傘で印旛村に降り、村民が米兵を捕まえたのを尋問して助けた、という事件がありましたね。

岡田：東京山手の5月25日爆撃に際しての事件です。落下米兵は25日夜落下して26日夜に捕まえました。それは大きな体験で、誇らしくもあり苦々しくもあります。特に戦後の村役場の対応に合わせて、私は「民衆は民衆を救ったものを裏切る」という民衆不信の抜きがたい信念を得ました。印旛村の役場に記録を残すように繰り返し請求しましたが、現在に至るまで頬被りです。当夜、私には米兵尋問を求めながら、助役は米兵から時計を巻き上げ、憲兵に咎められて返却させられたほどの破廉恥です。恥ずべき記録は残さなければ繰り返します。

今西：岡田さんは、戦争中に米兵の捕虜の命を助けられたのですね。

岡田：降伏した捕虜ではなく村民が逮捕した作物を盗んだ米兵です。私の家の屋号は「向田」です(岡田姓はたくさんいます)。捕まえたはいいが誰も英語を喋れません。私は食糧補給でちょうど帰省していました。「むけえだ(向田)のひろちゃんなら話せる」と役場から呼び出されました。全村警戒中に「捕まえた」と深夜の大騒ぎでした。村民は鎌や包丁で米兵を取り押さえている、私が制止しなかったら殺していたでしょう。憎きB29だし、泥棒だし、戦死者の家族にとっては復讐すべき敵でした。

今西：その時は殺さずに済んだわけですね。

岡田：殺さずにすみしました。米兵は戦後無事帰国し、大分たって村役場を訪れ、礼を述べたそうです。尋問が終わって私が説明して村民と米兵の興奮が収まったので、蒸かしたジャガイモを食わせ暖かい布団に寝かせ、翌日憲兵隊に引き渡しました。面白かったのはジャガイモを提供して米兵が「サンキュウ」と言って受け取った時です。みんな「日本語喋ったど！」とわっと笑いました。農民は「サンキュウ」は日本語だと思っています。あれで米兵は助かったし、緊張していた私も助かりました。結局みんなも助かりました。

今西：それは、よかったですね。

岡田：ええ。民衆への不信は戦後のことです。8月敗戦、米軍占領とともに戦争犯罪調査が始まります。10月穫り入れの頃だったか、私は食糧不足と一高の休校同然の状況から休学を届け、故郷で自給農業に従事していました。米軍憲兵MPがジープに乗って田んぼ道を、我が家を目指してまっしぐらに向かってきます。略奪暴行を恐れて母や妹たちを奥に隠し、一人私は白人MPの尋問に宣誓して答えます。落下兵を助けていますからやましいところはない。お付きの黒人兵に餅を差し出すと陽気におどけました。母や妹たちも安心して顔を出します。私が憤慨したのは村役場が、「知らぬ存ぜぬ」で事件の関係者は向田のひろちゃんだけだ、と言って役員は逃亡したことです。そこでMPはまっすぐ岡田家に向かってきたのでした。戦中は「米兵に暖かいジャガイモを食わせたり、布団に寝かせたりで岡田家はけしからん」と陰口三昧、戦後は手のひらを返して恩人を裏切る。これがかれらのモラルです。

農民には「サンキュウ」と「オーライ」は日本語です。戦後ロンドンに旅行した村民が「オーライ、オーライ」とイギリス人が日本語を喋っていたと報告していました。韓国では「バカヤロー」が通じます。

今西：勤労働員にも行かれたのですね。

岡田：ええ、工場動員ということで、「日本特殊鋼管」(1964年倒産)というところに参りました。そこで、細井君なんかとゆっくり話すことができたんです。中学ですとクラス別授業ですから、そうゆっくり話すことはできないけれど、勤労働員だとお互いに工場にいますし、工場の話をしたってつまらないから、

どうしても学問的な話をして、一種、逆の学校みたいでした。

今西：空襲は経験されたのですか。

岡田：もちろん経験しましたよ。特に世田谷の下宿での空襲では焼夷弾が上からザアザア音を立てて雨のように降って来ました。当たれば死にますし、当たらなくとも大火事です。6月か7月でしたか。

今西：東京大空襲の時はどうでしたか。

岡田：東京大空襲は3月9日夜から10日朝にかけてです。そのときは國學院大学すぐ裏手、若木町の同大学助教授大内義郎氏の家に下宿していましたが、終夜警戒に当たりました。大内氏は国学院大学の防衛隊長で号令をかけていました（大内さんは戦中の北京大学勤務当時の戦争犯罪を苦に戦後自殺しました）。山手は被害なく下町の大空襲は見ていただけでしたが、すごい煙が上がっていて下町が真っ赤に燃えているのが分かりました。B29が去って朝になっても消えない。全天を覆って地獄の空とはああいうものかと思いました。その後同じような光景は見たことはありません。真っ黒な煙の中に赤い火がチラチラと見えます。地獄の火というか一日中ずっと続いていました。

今西：一高に行かれてからも工場動員には行かれませんでしたか。

岡田：一高に入ってから日立航空機立川工場に動員され、艦載戦闘機から機銃掃射を受けました。一高の受験は1月、合格発表は2月、入学式は4月でしたが、緊急令で勤労働員は青学体制のまま継続、実質的には進学できません。時折安倍校長の夜学授業や竹山道雄さんのドイツ語の授業を受けましたが、普段は日本特殊鋼に勤務します。細井君の提唱で「こんな無駄はやめて勤労働員を解除し、高校で勉強させろ」と中学側に要求しましたが、返事はありませんでした。6月、工場は爆撃で生産停止となり、勤労働員は無意味となり、一高寮に入寮しましたが、緊急令は7月初に終了、一高に実質的に進学しました。7月末、授業もそこに再び勤労働員です。動員先は航空機製作工場だけれども、すでに2月、艦載機に徹底的に爆撃されて壊滅し（戦争遺跡として東大和市が保存しています）、ほとんど操業停止状況でした。一高生の作業は農作業だけです。これでは動員は無意味だから「全員一高寮に帰ろう」ということで勤勞

動員解除を部屋の仲間に訴えました。一高生はみな「馬鹿馬鹿しい、寮に帰りたい」と不平タラタラでした。しかし一緒に学校側との交渉に行こうとなると、「よし行く」と言ってくれたのは、静岡中出身の杉山茂樹君一人だけでした。こちらは二人、学校側を代表したのは幹事の二年生中野徹雄さんと中村稔さんでした。幹事は我ら二人の話聞くだけでした。“そうだ帰ろう”となったらどうなったか。私は日曜日を利用して単独で工場を脱出し駒場寮に戻り、寮にいた新島君にわけを話し、故郷まで送ってもらいました。8月10日、暑い日でした。

今西：中野徹雄さんは、戦後どういう進路を取られたのですか。

岡田：中野さんというのは一高名士というか大秀才で、後に厚生省薬事局長を務めました。一高時代は文系三秀才というので、松下康雄（後に日銀総裁）、所雄章（デカルト研究）とともに肩で風を切る勢いでした。

今西：中野さんも、中村稔さんらと、戦後、雑誌『世代』をやっておられたのですか。

岡田：そう、中野さんも『世代』をやっていたのではないですか。

今西：いいだももさんらと御一緒に。

岡田：ええ、ももさんはお元気ですか。

Ⅲ 一高哲研と社研——共産党入党

今西：敗戦の時は、農地改革でむしろ農地を没収された方だったんですね。

岡田：ええ（笑）。農地は一町歩以上はすべて没収です。単価は反600円。でも食べて行かねばなりません。小作地＝耕地を取り上げないと生きていけないわけです。そこで土地を返してくれと母が中心になって交渉しました。耕地をとりかえしたら次は耕作です。それでなんとか。

今西：どれくらいの土地をお持ちだったのですか。

岡田：山林はたくさんあったのです。田畑は二十町歩くらい、山林は六十町歩くらいありました。山林が残ってその山林を売って学費にしました。兄妹全部が東京の大学に進学しました。私は左翼運動と土地取上げの双方ともやりま

した。親掛かり先祖掛りののんきな坊ちゃんの仕事といえますが。

今西：お母さんは、戦後直後はだいぶ苦勞されたんじゃないですか。

岡田：ええ。乳母日傘の地主の跡とり娘も苦勞しました。戦前、職業と育児に疲れ母は脊椎カリエス（結核）に罹り、転地に、温泉に、温灸にと努め、おかげで治癒しましたが、43年、伯母の死、伯父の中気（脳出血）で跡とり責任から、疎開を兼ねて実践女専を退職して帰郷しました。当時はまだ義祖父岡田泰輔が家長でしたから、財産は全部義祖父が管理していました。だが戦中から戦後にかけてのインフレで母は貯金を使い果たし、味噌醤油も買えない有様です。財産は山林しかない、亭主（父）は稼がない、で残った山林の処分権をめぐる義祖父と母の激しい争いとなりました。結局、母が勝ち義祖父が譲りました。子供たちに勉強させるために、山林を売るのは自分の権利だと主張しました。カリエスは固まっていたましたが痔がひどく、田舎の力仕事や二里三里の歩きは無理でした。兄が農作業に奮闘しましたが、食糧事情の緩和と兄妹の上京進学のため49年、文京区に店舗を兼ねた住宅を建て東京に戻り、洋裁教育事業に収入を求めました。実践女専に復帰できればよかったのですが。

今西：お母様は、戦後の農民運動には冷ややかだったのですね。

岡田：ええ。冷ややかだったと言うか。昔からの地主ですから日本農民組合からは反対されました。逆に占領軍千葉民生局からは識者ということで再々呼び出され、占領初期に農村生活の合理化に協力を求められました。母は積極的にこれに応じて、千葉県選出の代議士と付き合っていました。母としては「生活合理化」「農村生活の改善」を実現したかったのでしょうか。この理想は農地改革から山林処分、学費生活費の工面、農民組合の妨害などで実現出来ませんでした。

今西：一高では、新島淳良さんが先に共産党に入党していたのですか。

岡田：そうです。私は最初は日本共産党には大いに拒否感を持ちました。アメリカ「解放軍」とか戦後無力になった天皇制「打倒」とか、気に入りませんでした。反資本主義ならまず反米ではないか、と言う考えです。反米運動をやりたかったのです。ただ先入党した新島君からすれば、自分が岡田を一生懸

命に説得して入党させたと思ったかもしれないが、これは友情とは別で私には自分の考えがありました。思想の組み立てが違います。

今西：岡田さんは、猪俣の日本帝国主義論の影響を受けておられたから、「講座派」流の天皇制論などには馴染まなかったのですね。活動の中心は、哲学研究会だったのですね。

岡田：ええ。哲学研究会は熱心にやっていました。授業には出ないで。一高でもっとも努力を集中したのは哲学研究会でした。

今西：哲学研究会では、後に日本福祉大学の教授になり、一時期日本共産党の哲学部門の中心にいた島田豊さんも一緒だったのですね。

岡田：島田君は真下信一さんに可愛がられて一高時代派手にやっていました。雑誌論文をすでに書いていました。中身の無いひどいものでしたが。真下さんも名前の割には、その後たいした仕事はしていないね。主体性論議の時は、一生懸命でした。その頃真下さんは哲学研究会の指導教授でした。校長の天野貞祐さんも哲研にときどき顔を出しました。マルクス主義か実存主義か、の時代でした。キェルケゴールとマルクスは読みました。ハイデッガーの『存在と時間』も読みました。もちろん翻訳です。ドイツ語で読んだのはカント、ヘーゲル、ハイネ、マルクス、エンゲルス、カウツキイなどでした。

今西：真下さんは戦争中に、京都の同志社から追われたのですね。

岡田：そうですね。それで一高の天野さんに呼ばれて寮監になった。

今西：ああ、寮監で一高に来ておられたのですか。

岡田：ええ。寮監で来ておられました。授業もおやりになったのですが、ご夫婦とともに寮住まいでした。真下さんとは一緒に風呂に入ったりで、非常に親しみやすい方でした。マルクスを学ぶために、どれだけ自分が重大な決心をしなければならなかったか、川に飛び込む覚悟だった、などの話を伺いました。

今西：真下さんは、人生論を語るのは好きでしたし、話ほうまかったですね。

岡田：そうそう。だから若い学生、教養学部生、旧制一高生には向いたかもしれません。木村健康さんもそうです。天野さんのカントもあまり専門的でなく

ひたすら礼賛です。

今西：島田さんは、戸坂潤さんの娘さん（嵐子）さんと交際していたそうですね。

岡田：仲良かった、おそらく恋人関係だったでしょう。初めて読んだマルクスの本が島田君から借りた戸坂さんの所有本でした。あれ月子さん（嵐子さんの妹、後にわだつみ運動で知り合う）に返してしまっただけで借しいことをしました（笑）。“Marx-Engels Literarischer Nachlass”の三巻本でした。遺稿集ですが戸坂潤と印が押してありました。島田君とその中の『神聖家族 Heilige Familie』を共訳しようとしたのですが、歯が立ちませんでした。当時はまだ翻訳は少なく、原典を読まざるを得ませんでした。髭文字 Fraktur のドイツ語を読みました。

今西：そうですね。私は先生がドイツ農業史の人（三好正喜先生）だったので、髭文字を見せられましたが、とても歯が立ちませんでした。

岡田：ああ、そうですね。ドイツ語というと私はまず髭文字を思い浮かべます。『ブリュメール』も『反デューリング』も『ルテチア』も髭文字でした。ヘーゲル『小論理学』の復刻はローマン体でしたが。

今西：戸坂さんこそ生きておられれば、戦後日本の哲学の歴史も変わったでしょうが…。

岡田：ええ、そうですね。それから三木清さんも、これは借しいことをしました。

今西：戸坂さんは敗戦直前、三木さんは敗戦直後ですからね。戸坂さんというのは、実にエピソードの多い人だったようです。

岡田：そうですね。戸坂さんの文庫が法政大学図書館にあります。蔵書には書き込みがあるでしょう。書き込みが無くともなぜないか考えるのも面白い。和辻文庫の蔵書には書き込みが非常に多く、それ自身が研究テーマとなる。以前は和辻文庫で書き込みを覗けましたが、最近は閉鎖されて自由には読めない。三木文庫もありますが中途半端です。それでもこの間ハイデルベルクでの三木さんの独文メモを見つけました。ご本人以外に誰も一度もこの蔵書（ワイン

ゲル著)の頁を開いていなかったのでしょう。

今西：一高時代には、よくキルケゴールを読んでおられて、それからマルムスを読まれたそうですね。

岡田：そうでしたね。どうしてキルケゴールがあんなに面白かったのか。主著『あれか、これか』は後になって読みましたがこれは面白い。ハイデッガーは面白かった。

今西：当時の学生は、よく読んでいたのではないですか。

岡田：そうですね。マルクスもキルケゴールもヘーゲルも読まれる時代でした。イギリス哲学、フランス哲学はあまり勉強しなかった。

今西：イギリス経験主義にはまっていた学生は、われわれの学生時代には殆どいませんでした。圧倒的にヘーゲルかマルクスですね。サルトルの実存主義をよく読んでいた友人はいましたが。

岡田：僕と比べると今西さんは、ずっとお若いですが、読書体験が近いですね。

今西：ヘーゲルは、70年代当時では見田石介さんの影響が強かったですね。

岡田：ああ、見田石介さん、見田さんは哲研にも見えられました。当時は甘粕石介でした。宗介さんのお父さんです。

今西：あの頃は、形式論理学と弁証法的論理学の関係などを議論していました。見田さんのヘーゲル研究は面白かったですね。

岡田：そうですね。見田さんはヘーゲル哲学の権威だった。それに松村一人さん。松村さんは法政大学の先生になりましたが、哲学はやめてしまい、ドイツ語の教授に徹していました。それから若手に土井虎賀寿さんがいました。

今西：「土井虎」さんは、三高の先生を辞めて東大の大学院に入り直したという変わった先生ですよ。

岡田：若い頃の「土井虎」さんは、人気がありました。

今西：私の恩師（三橋時雄先生）の三高の哲学の先生でした。あの頃は、やはりドイツ哲学ブームだったのですね。

岡田：現在はフランス哲学が、すごく多いですね。

今西：近年は、構造主義、ポスト構造主義が盛んでしたが、われわれの若い頃

は、マルクス主義か、せいぜい実存主義、マックス・ウェーバーでした。

岡田：それが日本の哲学のひとつの流れかもしれませんね。

今西：戦前の旧制高校の教養といえば、「デカンショ（デカルト、カント、ショーペンハウエル）」と言われていましたから。

岡田：ショーペンハウエルは流行らなかった。

今西：ショーペンハウエルの『意志と表象としての世界』などがよく読まれたようですが、ハイデガーの『存在と時間』などは、今読んでも名著ですよ。現代哲学の基礎です。ところで文学の方は、やはりフランス文学を読んでおられましたか。

岡田：ええ。バルザック、スタンダールが圧倒的でした、それからランボーが流行っていました。マラルメも。

今西：私も高校時代はバルザック、スタンダール、ロマン・ロランなどですね。

岡田：似てますね、バルザックなんかは人間喜劇で登場人物が複雑に絡み合い社会万華鏡の趣です。

今西：バルザックは、政治的立場は保守的でしたが、書くものは現代社会や人間をよく捉えていましたね。

岡田：そうそう。

今西：47年頃から唯物論哲学へ入って行かれたんですか。

岡田：47年に一高哲学研究会が発足しました。発足の呼びかけを掲示板で見入会しました。

今西：主体性論争のはなやかな頃ですよ。

岡田：主体性論争はケルケゴールとマルクスの問題でした。鳥田君はこの問題をよく出していました。私は、高校から大学にかけて知識の学習を日指すのか、それを犠牲にして戦後日本社会の死活の課題（反占領軍）に実践的に取り組むべきか、苦しんでいました。革命が歴史の必然であれば、なぜ人間は主体的に革命運動に参加すべきなのか。また社会科学的な真理を求める時、革命、実践、共産党の立場に立たずに真理に到達できるのか。この真理性と党派性の問題は、鳥田君の得意の論点でした。党派性こそ客観性であるという主張です。

今西：主体性論争は、宇野弘蔵さんから梅原克己さんまでまきこんだ大論争ですからね。

岡田：そうですね、時代の問題だったのでしょうか。

今西：映画はフランス映画ですか。

岡田：映画はもう圧倒的に30年代のフランス映画でした。私だけでなく一高生全体がそうでした。映画くらいしか娯楽がなかったとも言えます。高校生が映画を見て議論する。後はアルバイトでもするしかない。財産の切り売りで私はアルバイトをしませんでしたが、『パリ祭（7月14日）』など五回以上見ました。

今西：こうして聞いてみると、非常に中学・高校時代の教養が高いですね。

岡田：そうですね。旧制高校のよき教養主義の雰囲気が残り、戦後に強く復活した時代でした。さすがに今西さんは30年代フランス映画はそうは見えていないでしょう。戦争中に見たかった名画が戦後に見られるようになりました。そこにフランス文化への熱気がありました。たとえば「泰西名画展」が上野美術館に来るとなると、戦中名前だけのマチス、ピカソを本物で見られる。感激しました。

今西：私は、中高校生の頃に感心したのは、「風と共に去りぬ」や「怒りの葡萄」などのアメリカ映画でしたね。

岡田：新島君はアメリカ映画に感心していました。私はアメリカ映画は好きになれなかった。単純に思えました。

今西：「風と共に去りぬ」のような大作を、戦時下で作っていたアメリカと、日本はよく戦争していたな、とむしろ呆れました。

岡田：新島君はアメリカ映画ずきで、哲研で親しくなった奥山秀美君はフランス映画、フランス文学、フランス絵画でした。映画はほとんど奥山君と一緒に見ました。

今西：明治の後期、人生の煩悶から華嚴の滝に飛び込んで自殺した一高生（藤村操）がいましたね。

岡田：旧制高校生は深刻に人生とは何か考え込む。あるいは世界を底の底で続けているものを突き止めたい、とのファウスト的衝動に取り付かれる。哲学も

その一つですし宗教もそうです。

今西：自殺者では戦後では『二十歳のエチュード』の詩人、原口統三さんがいますね。

岡田：原口さんを直接には知りませんが、予告されていた自殺は寮生に大きな衝撃を与えました。非常に純粋な人だったようです。ショパンの『嬰ハ短調ワルツ』はあれから何度も聴きましたし、時々弾いてみます。この間、中村稔さんの話を聞いたら、かなりのお金持ちの支持者がいて、フランス留学の費用を出す用意があったといった事実があるから、貧乏の挙句に自殺したのではない、とのことでした。

今西：その頃の哲研にはドイツ思想研究者の野村修さんもおられますね。

岡田：はいはい。野村修君は非常にもの静かな人でしたけれども、芯の強い人で勉強家でしたね。定型詩を試みたいと言っていました。どうしても京大の大山定一先生につきたいと言って京大に進みました。また哲研には、若くして『中央公論』の編集長となった粕谷一希君もいました。勉強家でした。

今西：伊藤堅二さんというのは立命館大学で黒人文学の研究をやっておられた方ですね。

岡田：そうです。私の知っていた頃はハワード・ハーストを研究していました。

今西：私は、高校時代に京都の世界文学研究会に入っていて、伊藤さんや同じ立命館の永原誠さんらに、リチャード・ライトの『アメリカの息子』などの読み方を教えていただきました。ところで当時の一高の校長は、天野さんだったのですか。

岡田：私の時は天野さんでおしまいでした。麻生磯次さんが最後の校長です。

今西：天野さんの授業には出ておられたんですか。

岡田：天野さんの特別講義「カント『実践理性批判』」には出席しました。安倍校長の入学式の挨拶は鮮明に覚えています。戦争中の45年4月12日の夜、入学式の冒頭安倍さんは文科生の方に体を向けなおして、「よく文科に入ってくれました」と言いました。参りましたね。私は44年春には文科志望でしたが、文科の徴兵猶予は停止され、理科には猶予は継続されました。物理は好きで理

科は嫌いではなかったが、理科志望は徴兵逃れの転換で、裏切り者でした。安倍さんは文科志望者に「有難う」と言ったのです。大礼服に身を固めた安倍さんの印象は強烈でした。

今西：当時、理科生は徴兵延期になったのですね。

岡田：徴兵延期ですね。入試に落ちたらたちまち軍隊です。理科に行くか軍隊に行くか、受験生も必死です。それでも中村稔さんのように文科志望を貫いた人もいました。新島君も細井君も文科を受けました。

今西：その後、占領軍の「解放軍」規定などにはご批判はあったけれども、共産党に入党されたのですね。

岡田：一高哲学研究会のときに入りました。48年占領軍のインボデン中佐が一高記念祭に干渉すべく2月1日来校したとき、共産党細胞が抗議の反米デモをする、と言うのでそれに参加し、9日に入党しました。反米の目標と実存的決断が一致したこととなります。共産党が本気で反米闘争をやる、自分の自尊心からもここで決断しなくてはならない。ハイデッガーの「被投」と「企投」でもありました。

今西：入党推薦者が新島淳良さんと上田建二郎（不破哲三）さんというのがなかなか面白い組み合わせですね。

岡田：上田君とはそれ以前から数学を教えてもらったり、『資本論』や志賀・神山論争を通して仲良くしていました。私は志賀（義雄）派だけれども上田君は神山（茂夫）派だった。これは反米資本主義か反天皇制か、社会主義の一段革命かそれとも民主主義革命から次に社会主義革命の二段革命かの論争でありました。そして上田君は議会への進出を重視し、私は直接行動を重視するという政治方針です。これは上田君が後に不破哲三となって党の中心となり、議会主義的に政治勢力を伸ばした伏線であった、と考えます。彼は非常に議会主義的でした。一高時代は私の方がレーニン主義だった。

今西：不破さんは神山派だったのですか。

岡田：私はひたすら志賀派で上田君とはかなり議論しました。黨員になってからは一層親しくなりましたが、頭はいいし、よく勉強していたし、記憶力は抜

群で、党活動においては疲れを知らぬ活動家でした。政治状況を読み、情勢変化に対応して政治方針の変更を考える点で、私から見て哲研の高沢寅男君より、はるかに柔軟で変幻自在なところがありました。入党に際して高沢君は「自分が推薦する」と言ってきましたが、断って上田君に頼みました。

今西：そして1948年の一高の記念祭に米軍が干渉してきたのですね。

岡田：ほかの高校での生徒の急進化は激しかったし、穏やかな一高でも反占領軍の空気は強かった。前年の一高記念祭では反米デコレーションが多かった。寮デコレーションとは、一年に一回の2月1日の記念祭に当たり、寮の各室が趣向を凝らして公開する飾りつけのことですが、そこにいかに隠喩や諷刺を盛りこむか、気品ある文化的雰囲気を出すが各室の知恵比べ、細工比べでした。戦争直後なので占領軍への諷刺が少なくなき、米軍の神経に障るものがありました。ここは上田君がよく記憶しているが、傑作に「人犬住隣」と「夜行列車」というのがあった。「人犬住隣」は、犬がMP（ミリタリー・ポリス）の札を首にぶら下げ、豪邸（占領軍は豪邸を接收して住居にしていた）の門を警備し、隣には貧相な日本人が焼け跡の掘立小屋に住んでいる、というデコレーションで、「人犬住隣」はすなわち“人権蹂躪”の趣向です。「夜行列車」は、電光煌々たる一等車に米軍将兵が悠々と座り、連結する普通車は日本人がギュウギュウ詰めの東海道線列車のデコレーションで、米軍専用車の屋根上に朴歯高下駄の一高生が腰をすえ跨って読書している、というもので敗戦の鬱憤を晴らす趣向です。

今西：天皇制批判の漫画を書いたのは不破哲三さんですか。

岡田：48年、哲学研究会（中寮28番）のデコレーション漫画を描いたのは高沢君です。不破君は社会科学研究会（中寮15番）でした。社研のデコレーションは上田耕一郎さん作成の「ほーらヴァレリー」でした。哲研のほうはアイデアに行きつまり、夜遅くなってひねり出したのが高沢君で、私も賛同したから責任はあります。その主張は、マルクスによるヘーゲル『法哲学』中の国家法批判を典拠にした、戦後天皇制＝立憲君主制の諷刺です。「帝王の最高の立憲行為は、したがって彼の性行為にある。けだし、帝王はこの行為によって一人の

(新なる) 帝王を産み、かくして自らの肉体を継承させる」(マルクス)。これは立憲君主制の矛盾を突いたもので正しい。だがこの漫画がかなり品位を欠いていたのは確かで公開を憚るものがあった。真下さんは苦い顔をされるし、弁論部の後藤昌次郎君は「主張はいいが、表現がまずい」と撤回を求めて強硬です。結局公開はやめました。漫画は上手でした。

これに比べて耕一郎作品は美しくもあり詩的でもありました。ギリシャ神話のナルシスが水面に映る自分の姿に見惚れて水仙と化すデコレーションで、水辺の細工も人形も繊細でした。これは寮生に流行っていたヴァレリーへの皮肉で、「ほーら(ポール)」は「法螺」でヴァレリーは「ばれたり」でして、趣向はフィヒテ(自己内の自己)やヘーゲル(絶対精神の自己発展)の観念論が実在を認識しない、という唯物論的な主張です。哲研は下品なものを作りましたね(笑)。あれは社研の勝ちでしたね。

今西：上田さんは、社会科学研究会なのですね。

岡田：ええ、社研ですね。46年、一高内に党を最初に作ったのは社研です。

今西：上田耕一郎さんや平岡茂樹さんらが創立者でしょうね。

岡田：耕一郎さんが草分けでしょう。社研が中心でした。新島君も社研のときに入党しました。

今西：平岡さんは、その後どうされたのですか。

岡田：西武の堤君の下でビジネスに入ったじゃないかな。でも党は最後までやめなかった。

今西：哲研では共産党員が増えていったんですか。

岡田：増えてゆきました。みんな同じような気持ちなんではないですか。いっせいに増えました。それで社研を追い抜いて、一高左翼では哲研の方が中心となって行きます。社研の方は逆に文化人的な高階秀爾君などが入会してくる。上田君や平岡君の方が、発言を遠慮するようになりしました。それでも政治的な議論は上田君と一番やりました。映画や文学となると哲研の奥山君の方が話が弾みました。党組織の中にいると情勢分析でも、機関紙『自由の柏』の編集でも、寮『壁新聞』でも高沢君より上田君の方が役に立ちます。高沢君には悪いが寮

委員長選挙演説などはまずまずでも、党活動方針とか平和擁護闘争とかの議論となると彼はダメでした。私の話が早くなったのは上田君のせいではないか。彼は次から次へと議論は早いんです。理解し討論するためこちらもスピードを上げないと付いてゆけない。

今西：高階さんも社研ですか。

岡田：高階さんはそうですね。平川裕弘さんも社研ですね。

今西：平川さんはどちらかと言うと保守派の論客ですよ。彼らは教養学派、駒場派とも言われますが…。

岡田：そうですね。芳賀徹、平川、高階、本間長世、立派な仕事をしました。

今西：芳賀さん、平川さん、高階さんらは小さい頃からの同級生なのですね。

岡田：これは友人の社研の鈴木正也君から聞いたのですが、みんな高師付属中の出身でそろって一高に入ってきた。そこで優秀な連中を社研に入会させようと、まず中学で級長だった古山洋三君に目をつけ、彼を社研に引き込んだら、みなぞろぞろと入会してくれたそうです。ところがみな左翼とは違うから距離を置かれてしまったのが実情です。古山君とは後にわだつみ会で同志となり深い付き合いとなりました。

今西：この頃、徳田球一さんの選挙はやられたのですか。

岡田：ええ。49年の選挙でした。トラックに一諸に乗って、乗ったり降りたりピラまきやらパンフレット売りやら奮闘しました。

今西：「徳球（とっきゅう）」さんというのは、すごいアジテーターだったそうですね。

岡田：ええ、アジテーターですね。ファイトもありました。

今西：沖縄出身の人ですね。

岡田：ええ、徳球さん、不破君と一緒にトラックに乗っていたいたんです。

今西：徳球さん、不破さんが一緒にトラックに乗っている図というのも面白いですね。

岡田：思い出すと面白いですね。党内分裂もなくいい時代だったとも言えます。選挙で35人当選しました。渋谷の開票速報板の前に立ち尽くしました。東大入

試も何のその、有頂天に喜びましたが実際は社会党の票を食っただけでした。

今西：この時期くらいから、岡田さんのなかでもマルクス主義の影響が強くなってゆくんですね。

岡田：47年から49年にかけてですか。私の哲学研究会の時代です。48年秋からは私は、マルクスの『経済学批判』と『資本論（長谷部訳）』に集中します。

だが、60年代全共闘の大学解体運動まで考えると、大いに反省すべきと思うのです。我々が旧制高校の古典学習の伝統を断ち切って、学生運動風な大学の安易な政治化をもたらしたのではないかという反省です。マルクスの唯物論哲学、唯物史観はそれなりに古典学習と批判から厳密に生まれたものであるにしても、共産党の革命運動、レーニン主義、となると政治主義な功利主義の卑俗に墮してゆく必然性があります。51年に国際派のオルグとして新制東大細胞を指導したことがあります。わずか2年、駒場寮にはすでにカントもヘーゲルもデカルトもなく、レーニン、スターリン、毛沢東、劉少奇しか文献が無い。左翼学生の学習はこれでお終いです。呆れ返りました。だがこれは哲学研究から左翼運動への転換が必然的にもたらしたのではないのか。哲学研究会は旧制高校の鬼子だったのか。我々はなんと言ってもアカデミック・フリーダムを前提にしてマルクスを学んだのですが、全共闘となるとリベラルな大学を解体するゲバルト行使となる。我々哲学研究会は旧制高校の哲学・文学的素養を、マルクス主義を介して安易かつ卑俗な左翼学生運動に変えてしまったのか。

今西：藤田省三さんが、よく「戦後の連中は、スターリンから勉強したり、毛沢東から勉強するからダメで、戦前の人たちはもっとヘーゲルやカントを読んでいた」と言われていましたね。

岡田：よく言えばそうなんだけれども（笑）。結論がマルクス・レーニン主義となると非常にマキャベリスティックになっちゃう。実践運動の成否が基準となって卑俗な功利主義に墮落する。

今西：政治主義的な読み方も困りますね。

岡田：理論は古典から入っていかざるを得ないから、レーニン、毛沢東から始めるのは困ります。

今西：今の共産党では、それさえ読んでいないと言われていますが（笑）。

岡田：藤田君とは法政大学で一緒になりましたが、本当に集中力のある思想家です。

今西：しかし藤田さんは、後期に「レーニンの読み方」を書いていますか…。

岡田：『現代史断章』ですか？あの本では彼とケンカしました。理論上思想上の大きなケンカでした。私はソ連研究に従事していて、スターリン体制はレーニンのプロレタリア独裁の政治的帰結と考えていましたから。

今西：私もレーニンの民主主義論というのは信用していません。

岡田：藤田はレーニンをラディカルな自由主義者というのです。私の方は『何をなすべきか』は革命組織の独裁でなんだよこれは、と大ケンカ（論争）でした。

今西：レーニンの民主主義論というのは、60年代から70年代のひとつの流行でした。

岡田：藤田君は流行に乗る人ではないが、時代には敏感です。

今西：敏感でしたね。アドルノらの紹介も早かったですね。

岡田：チャップリン論などさっと書いてしまう。私には出来ない芸当だ。ああいう才能はありません。

今西：晩年はかなりフランクフルト学派に傾斜されていたようですが…。エコロジーの捉え方などでも影響を受けました。

岡田：私も後でアドルノをゆっくり読みました。藤田君は尊敬しているし、彼からはカント『判断力批判』やアレントにつき多くの教示を受けました。いくら激しく議論しても信頼と友情は揺るがなかった。

（続く）